

**<紹介>**

エコノミクス  
第8巻第1号  
2003年8月

**リバプールと奴隷貿易**

—海事博物館の取り組みを中心に—

**徳島 達朗**

**まえがき**

2001年8月31日から9月8日まで、南アフリカのダーバンで「人種差別に反対する世界会議」が開催された。主要テーマのひとつとして「奴隷貿易に関する謝罪と補償」が、国際会議で初めて議題となった。

もちろん、これは容易な問題ではない。15世紀から19世紀の間、西欧諸国による大西洋奴隷貿易の展開で、「アフリカ人」のディアスポラが生じた。数千万（人数は不明、この分野の論争もある＝徳島）のアフリカ人が強制移動を強いられ、南北アメリカ、カリブ海に奴隷労働力として投入された。この奴隷貿易・奴隷制度の被害は計り知れない。しかし、大西洋奴隷貿易の主体（西欧諸国）は、現在いわゆる先進国の位置にあり、「人権外交」「デモクラシー」の唱道者として高いところに立っている。「人道に対する罪」「過去の被害補償」を持ち出されても迷惑だという態度である。しかし、奴隷貿易が国際会議に持ち込まれ議題となるところまで、「過去と現在」は接近し激突しているということを認識することが大事である。アメリカはこの国際会議で諸問題を真剣に議論する熱意を当初から失っており、「パレスチナ問題」が討議されることを嫌って、イスラエルを伴って退場した。

その直後、「9・11」が生じたのであるが、アメリカ（ブッシュ）とイギリ

ス（ブレア）の対応は、「オサマ・ビン・ラディン」を求めてのアフガニスタン侵攻であり、そして今回はイラク戦争（「デモクラシー」を掲げて侵攻した）へ続く道であった。

リバプールが大西洋奴隷貿易の拠点港として「繁栄」したことは事実であるが、その歴史の「負の遺産」はどのように受容されているのであろうか。先年（2000年）リバプール市議会は奴隷貿易に果たした同市の役割に関して謝罪決議を行っている（「朝日新聞」2001年7月8日）。また、リバプール海事博物館は「大西洋奴隷制ギャラリー」を常設している。この企画には市民の間で意見が分かれており、「リバプールのイメージを暗くする」という意見もあるという。しかし、博物館は「事実を知ることが重要だ」という立場で展示している（「朝日新聞」前掲記事）。

筆者は今春（2003年3月3－8日）、アボリショニズム研究のため、同博物館内の図書館で資料収集を行い、当ギャラリーも見学した。博物館の地下室をその展示にあてていた。中央にある奴隷船内の再現は陰惨としていて気が滅入る。小学生たちが先生に引率されて見学に来ていた。子供たちは熱心にノートに書いたり、スケッチしていた。

本稿ではリバプール海事博物館発行のパンフレット *Maritime Liverpool* により「大西洋奴隷制ギャラリー」展示の説明を紹介する。さらに海事博物館がウェブサイトとして展開している *Slavery History Trail* も紹介するが、筆者がそのコース（一部）を歩いた時に撮影した写真を組み込んでおく。

### (1) 「大西洋奴隷制」 Transatlantic Slavery（徳島試訳）

(\* *Maritime Liverpool: The Guide to Merseyside Maritime Museum, HM Custom & Excise Museum, Museum of Liverpool Life*. 1998, 2000より)

幾千年にわたり、人々は世界のさまざまなところで、同じ人間を強制的に奴隷化してきた。およそ1500年から1900年の間、ヨーロッパ人は少なくとも1200万の人々を、東アフリカおよび西中央アフリカから強制的に引き離し、残酷な状態で船に積み込み大西洋を横断させた。

奴隷船は三角形のルートをとった。ヨーロッパから奴隷と交換する諸商品運び、アメリカへ奴隷を搬送し、そして砂糖、綿花、タバコ等の奴隷に

より生産されたものを持ってヨーロッパへ戻るのである。

西アフリカは独自の文化を持つさまざまな国が、しばしば領土と地位を競い合っていた。芸術と技能は開花していた。ヨーロッパ人との金、象牙、胡椒の合法的な交易は長い歴史を持っていた。家内奴隷は存在したが、単なる財産として売買される動産奴隷ではない。



一部の奴隷はヨーロッパ人に捕らえられた者だが、大部分はアフリカの指導者が織物、ガラス球、マニラ(金属貨幣)、タカラガイ(貝貨幣)、アルコール、銃など広範な雑多なものと交換するために提供したのである。ヨーロッパ人が銃を提供したために西アフリカの政情不安定は増大した。ヨーロッパ人商人に売られた人々のおよそ三分の二は男であった。

奴隷貿易に従事したヨーロッパの主な国々は、ポルトガル、スペイン、フランス、オランダ、そしてイギリスであった。イギリスでは奴隷貿易は1640年代に開始されたが、1730年頃まではロンドンとブリストルが指導的な存在であった。リバプールは1750年以降、奴隷貿易を支配した。

奴隷船の状態は戦慄すべきものであった。男たちはぎゅうぎゅう詰めで、寝かされて、鉄の足かせで拘束されていた。女や子供は分離されていた。悪臭にみちており、伝染病もよく発生した。アフリカ人は反乱をを起こし抵抗し、中には自殺をした者もある。おそらく5人に1人は死亡したことだろう。航海は六週乃至八週間であった。リバプールの奴隷船の船長であったジョン・ニュートンや捕らえられたアフリカ人エキアノ(再現された奴隷船の船倉\*ギャラリー内の展示の一部=徳島)が「中間航路」の恐怖を伝えている。到着すると、大部分の奴隷はプランテーションでの労働用に売られた。多くの者が奴隷所有者から過酷な取り扱いを受けた。そして、女たちはしばしば虐

待を受けた。

多くの奴隷たちは、ノロノロと仕事をしたり、サボタージュしたり、逃走したり、主人に敵対し蜂起した。帰りの船は奴隷労働による産物をヨーロッパに運んだ。砂糖、ラム、砂糖液がカリブ海からの最も重要な積荷であった。北アメリカからの船は、タバコ、米、1870年代からは綿花を運んだ。コーヒー、ココア、胡椒、マホガニー、染色材が帰り荷であった。これらの生産物はヨーロッパ人の社会生活を変化させた。そして、それから生じた富が資本主義の勃興に寄与した。歴史家たちはこの広がりに関して、意見が分かれているが、奴隷制の利益がヨーロッパの経済成長に、特にイギリスの産業革命への貢献において刺激を与えたのである。アフリカ人のかなりの人数が、船員や召使としてヨーロッパへ苦勞してたどり着いた。

奴隷制は奴隷の抵抗、経済的要因、人道主義者のキャンペーンを通じて終了した。1807年以降、イギリスその他の国の奴隷貿易が廃止されても、大規模な非合法の貿易がさらに六十年も継続した。その多くはキューバ、ブラジルとの奴隷貿易であった。

奴隷制の遺産は今日われわれとともに存在する。この遺産のインパクトに関しては意見の一致を見ていないけれども、アメリカには幾百万のアフリカ人の子孫が残されており、彼らの多くは人種的な理由で差別を受けている。西アフリカは深い苦惱を味わったが、ヨーロッパやアメリカの文化は音楽、芸術、料理など少なからず豊かになった。

(\* 以上紹介した一文は、「大西洋奴隷制ギャラリー」専用のパンフレット *Transatlantic Slavery: Against Human Dignity* 1984. の説明の要約である。別稿で全文を紹介することにする。=徳島)

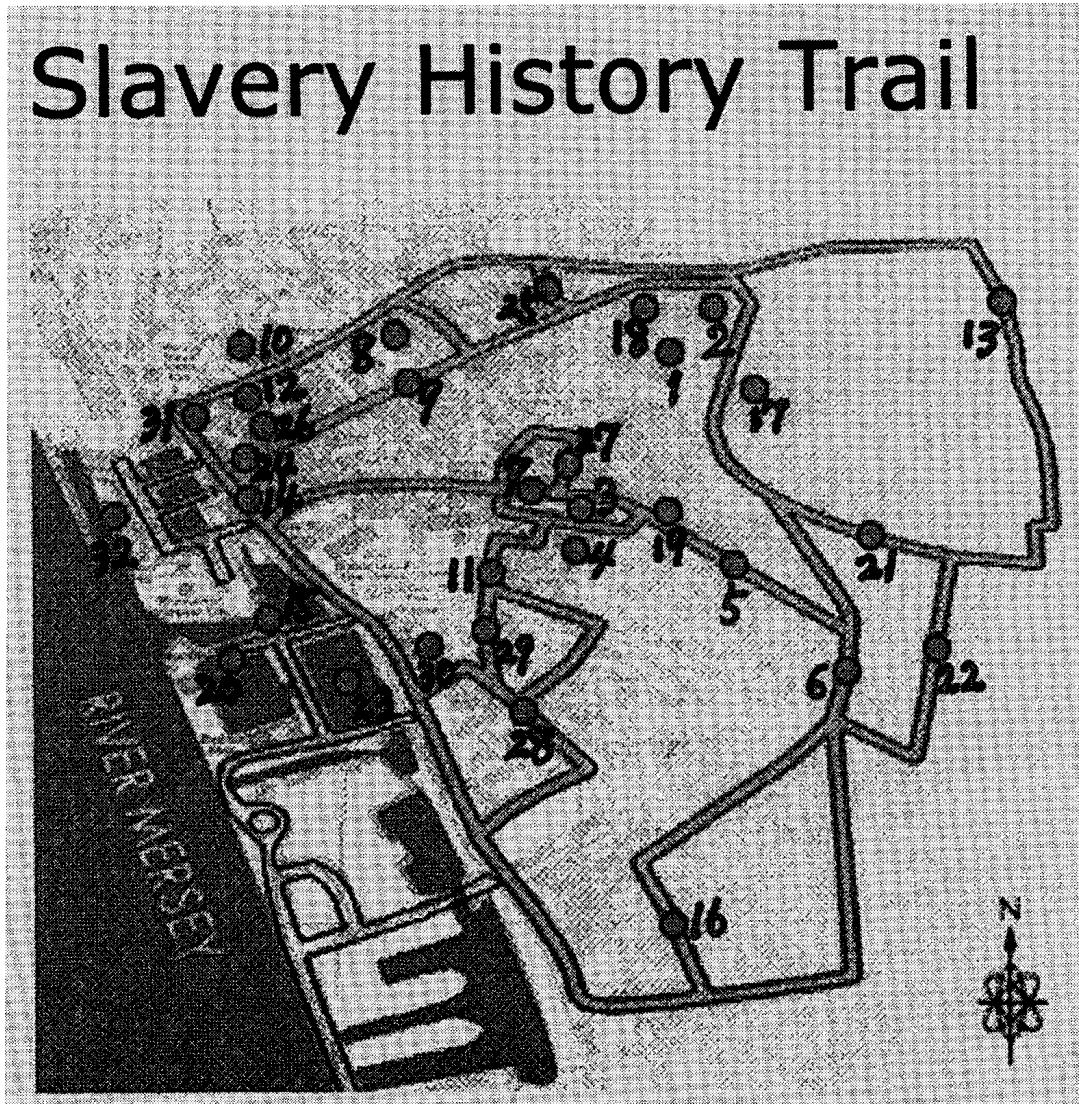
(2) リバプール・マージーサイド・海事博物館編「奴隷史をたどる」  
(徳島試訳)

*Slavery History Trail*, Edited by Merseyside Maritime Museum,  
Liverpool

(<http://www.nmgm.org.uk/maritime/trail/slaverytrail.html>)

\* リバプール海事博物館がウェブで展開している「奴隷史をたどる」を紹介した。

- \* さらに、筆者（徳島）が、そのルートの一部を歩き、撮った写真をそえた。
- \* 略図に付したナンバーは、本文のナンバーと一致する。



### 1 St.George's Hall

セント・ジョージ・ホール（\*外部改装中，中ではレストラン営業中＝徳島）

1842-56年に法廷，コンサートホールとして建設。「貿易と技術のブリタニア」という彫刻をほどこされた南壁は危険な状態になり撤去された。

## 2 Walker Art Gallery

ウォーカー・アート・ギャラリー

1874-77年の建設，当ギャラリーは奴隷制および黒人と関係を有する絵画が数点ある。最も有名なのは，「狩り出された奴隷」で，1861年にリチャード・アンズデルの作である。

(\*本絵画は修復のため撤去されている。これはショップで買った絵葉書である＝徳島)



## 3 Athenaeum

アスネイム

ジェントルマンのクラブ，図書室，読書室で1799年，アボリショニストのウィリアム・ロスコー，ジェームズ・カリーを含む一団の人々により建

てられた。

#### 4 Bluecoat School

ブルーコート・スクール

1707年に創立, 1716-17年に建造され, 商人, ブライアン・ブランデルも支援した孤児のための学校である。ブランデルはアフリカからの奴隷の搬送はおこなわなかったといわれるが, 奴隷により生産されるタバコ, その他のプランテーション産品を運んだ。

#### 5 Bold Street

ボルド・ストリート

この通りは元々ロープ製作のためにつくられたもので, 細長い土地はロープの製造のために利用された。ここは1780年頃, 居住地としてレイアウトされたが, 有名な奴隷商人, 砂糖商人, ジョナス・ボルドの名に因んでいる。

#### 6 Berry Street

ベリー・ストリート

ベリー・ストリートは元来ロープ用の道として作られ, 細長い地域はロープ製造用として使われた。ロープは帆船の装備に不可欠であり, リバプールには1ダースをこえるロープ用の道があった。

#### 7 Church Street

チャーチ・ストリート

今日, リバプール診療所の側に Littlewoods が立っているが, これは1782年にここへ移ってきたものである。Heywoods を含む多くの奴隷商人によって, この町の貧者の治療のため建てられたもので, アボリショニストの James Currie はここの最初の外科医であった。

#### 8 Cunliffe Street

カンリフ・ストリート

この街路は1716年, 1729年, 1735年に市長であった Foster Cunliffe に因んで名づけられた。彼と息子たち, Robert と Ellis は有名な奴隷商人であった。1752年に奴隷貿易用の4隻の船を所有していた。

## 9 Dale Street

デール・ストリート

狭い道路が走っていて、奴隷貿易の最高時はどのようなであったか感慨を持つことだろう。事実、この道路は古くて、部分的には中世以来のものである。

## 10 Earle Street

アール・ストリート

アール家は18世紀を通じて奴隷貿易商人であった。John Earle と二人の息子 Ralf と Thomas は市の行政に従事し、三人とも市長の職にあった。Earle 家の文書は Merseyside Maritime Museum に古文書として保管されている。

## 11 Yorke Street

ヨーク・ストリート

1758年に建設され、Fawcett Preston が鍋、やかん、ポット、鉄砲等の金属製品を製造していた。彼らはカリブで使用される砂糖ボイリング鍋、サトウキビの破碎機も製作した。1813年以降、プランテーションで使われる蒸気機関が製造された。

## 12 Exchange Flags

エクスチェンジ・フラグズ

ここでリバプールの商人たちは屋外で商売をおこなった。最もおなじみのものはネルソンのモニュメントで、大衆の寄付により1813年に建てられた。当地の話としては鎖につながれているのは奴隷をあらわしているというが、事実はネルソンの戦いでの捕虜である。



### 13 Gildart Street

ギルダート・ストリート

Richard Gildart は奴隷商人で政治家であった。彼は1752年にアフリカと通商する Company of Merchant に名が記されている。彼は奴隷貿易に従事する三隻の船を所有していた。Gilbert は市行政に従事し、1734-1754年の間、市長を3期、廷吏、タウンの議員も勤めた。

### 14 Goree

ゴーリー

Goree は奴隷貿易のおこなわれている西アフリカ、セネガル沖の島の名に因んでいる。現地の倉庫には鉄のリングが壁にとりつけられていたといわれるが、リバプールにはほとんどアフリカ人は連れてこられなかった。

### 15 Graving Docks

乾ドック

19世紀初頭に変化しているけれども、二つのドライ・ドックは1756年と1765-69年に建設されたもので、リバプールのドックシステムで現存する最古のドックである。奴隷貿易で使用される船はここで修理された。

### 16 Jamaica Street

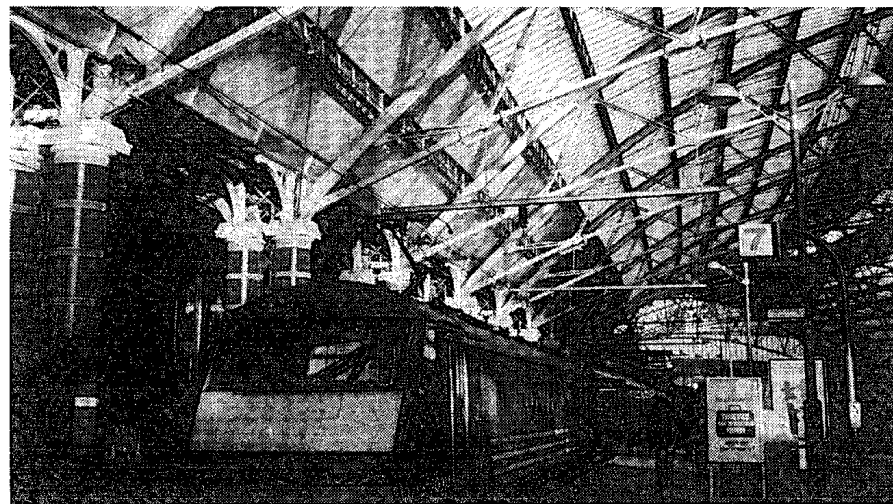
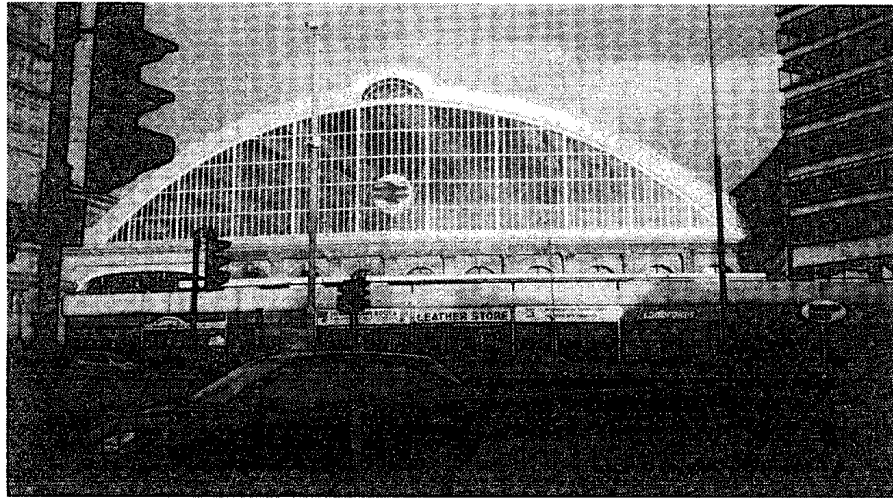
ジャマイカ・ストリート

ジャマイカは西インドの最大のイギリス植民地であった。同島は1655年に占領され砂糖の主供給源となった。多くのリバプール奴隷船の最終目的地であり、多くのリバプール商人が同島で莫大な利益をあげ、ある者は同島に所領を持った。

### 17 Lime Street Station

ライム・ストリート・ステーション

リバプール・マンチェスター間の鉄道は世界で最初の営業鉄道であった。綿花、綿布その他の商品を輸送するために1820年代に建設が企てられた。



株主の中には John Gladstone や John Moss のように奴隷制を通じて金持ちになった者たちも含まれていた。

## 18 Liverpool Museum

リバプール・ミュージアム

18世紀、William Brown Street は Shaw's Brow として知られており陶器の産地でもあった。広く集められたアフリカのものが2002年に展示される予定である。（\*その展示は見当たらなかった＝徳島）

## 19 Lyceum

ライセウム

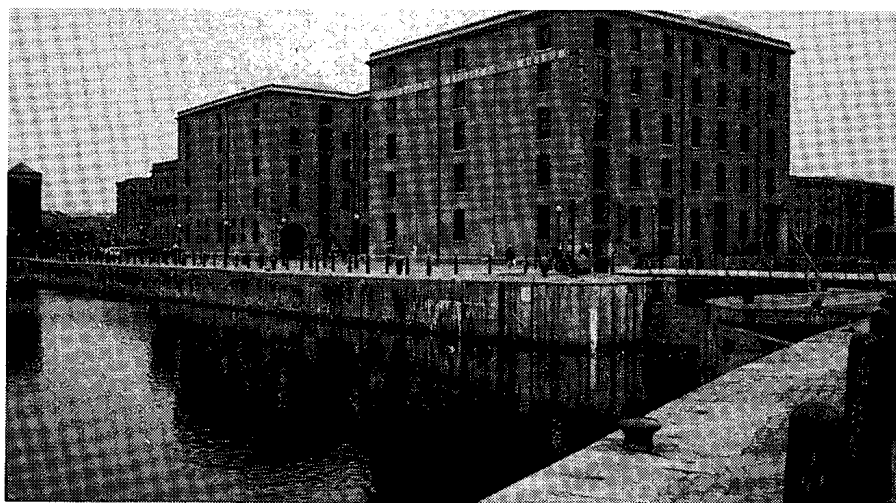
ライセウムは1800-02年にジェントルマンのクラブとして建設され、

1757年に建てられた会員制図書館を母体としている。創設者には多くのリバプールのアボリショニストが含まれている。これが建てられた理由のひとつはコーヒー・ハウスの雰囲気騒々しいことと「アフリカ貿易」に参加している人々が多すぎることであった。

## 20 Merseyside Maritime Museum

### マージーサイド海事博物館

マージーサイド海事博物館は1846年に完成した Albert Dock の倉庫の一つを占めている。博物館には大西洋奴隷制ギャラリーがあり、海事記録、図書を所蔵し、奴隷貿易と関係するものを含んでいる。



## 21 Mount Pleasant

マウント・プレザント

1790年代, Mount Pleasant は町のはずれであった。Roscoe Memorial Garden はこの街路に隣接し, リバプールの最も有名なアボリショニスト William Roscoe (1735-1831) の埋葬されている地である。

## 22 Rodney Street

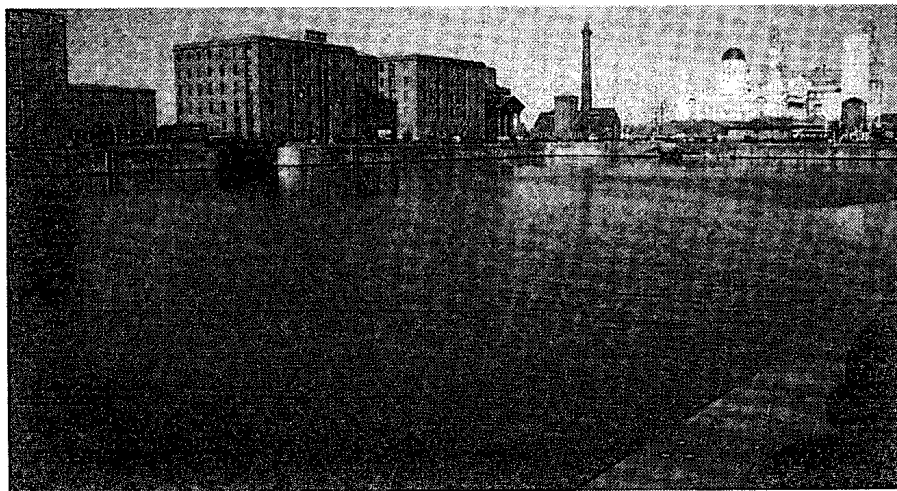
ロドニー・ストリート

1782年と1801年の間に建設されたこの通りにはリバプールの商人の家が沢山あった。Admiral Rodney の名に因んでいるが, 彼は1782年, St. Lucia でフランスを破り, 西インドにおける影響力を高めた。Rodney は奴隷貿易を支持した。

## 23 Salthouse Dock

製塩ドック

このドックの名は近隣に立つ塩精製所からとったものである。それらは1696年にチェシャーの塩を加工するために建造された。塩はニューファウンドランドに向けて塩だら用に輸出され, その後, 西インドプランテーションの奴隷の食料として送られた。



## 24 Water Street

ウォーター・ストリート

多くの商人がここに家と営業事務所を構えた。Barclay Bank が Martin's Bank の本店として、1927年にタウンホールに隣接して建てられ、Heywood's Bank と合併した。この銀行は Arthur Heywood と Benjamin Heywood によって建てられたが、彼らは奴隷貿易船を所有していた。

## 25 Truman Street

トルーマン・ストリート

Dale Street と Truman Street の角の目立つ建物はジョージアン時代のリバプールの現存する建物で最高のものである。それは1790年に建てられた John Haughton の家であり、Truman Street に蒸留酒製造所が、それに隣接して建てられた。アルコール飲料はアフリカとの交易で重要な商品であった。

## 26 Town Hall

タウンホール

タウンホールは18世紀において、タウンと商業活動の中心であった。1749-54年に建てられた。1795年の火事のあと、再建され豪華に装飾された。彫刻をほどこした壁面にはリバプールの商業活動のルート、ライオン、鱈、象、アフリカのお面などが描かれていた。



## 27 Tarleton Street

タールトン・ストリート

タールトン家は三世代にわたる活発な奴隷商人であった。John Taretonの息子のうち三人は1786年から1788年まで奴隷貿易に関与し、52回の航海をおこなっている。第4番目の息子、Banasterは国会議員であり反奴隷運動の敵対者の一人であった。

## 28 Park Lane

パーク・レーン

多くの商人のウェアハウス Warehouseはこの地域にあった。Charles Roe & CompanyはSparling Streetの近くにあったが、1667年に創設されアフリカとの交易用の銅、真鍮やマニラ（金属製の貨幣）を供給した。19世紀には多くの黒人船員がこの地域に住んでいた。

## 29 Paradise Street

パラダイス・ストリート

18世紀中、この地域には船員向けの宿屋、酒場が多数あった。Thomas Leylandは最も活発な奴隷商人であったが、彼はKing Street（現在は存在しない）の近くに事務所を構えていた。

## 30 Old Dock

オールド・ドック

1708年に建設を開始し、1715年に開業したが、これは世界で最初の商業用の囲い込まれたウェット・ドックであった。船舶は潮の状態に無関係に荷揚げ、荷降ろしが可能であった。多くの奴隷船がここから出航して行った。1826年にはドックは埋め立てられ近代的ビルがこの地に建てられた。

## 31 St. Nicholas's Church

聖ニコラス教会

船員の教会として知られる聖ニコラス教会は、中世期に創設されて以来、

数回建て替えられた。教会の角にはコーヒーハウスがあり、18世紀中、ここでは奴隷貿易用の手錠、足枷が競売されていた。

## 32 Pier Head

### 突堤

George Dock 側の埠頭にある建物は1771年に建てられた。ドックの最盛期、西アフリカ、北アフリカ、西インドと交易する船舶が、三隻も、四隻も停泊していたことだろう。

